The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	新出土資料関係文献提要（三）
Author(s)	黒田, 秀教
Citation	中国研究集刊. 2003, 34, p. 96-100
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61128
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　陽号（総34号）平成十五年十二月　九六―一〇〇頁

新出土資料関係文献提要（三）

黒田秀教

本提要は、本誌前掲の「新出土資料関係文献提要（二）」の続編である。ここでは、郭店楚簡『老子』に関する文献を取り上げた。

『郭店竹簡老子釈析与研究』（出土文献訳注研析叢書P001、丁原植著、万巻楼図書有限公司、一九九八年九月、三八七頁、横組繁体字）

郭店楚簡の三種の『老子』写本（甲本・乙本・丙本）に対する釈文と注釈。附録として、王弼本『老子』と楚簡『老子』との対照結果、および楚簡『老子』全体の釈文を載せる。甲本は五組、乙本は三組、丙本は四組に分け、今本『老子』の章立てに従って分章している。

各章ごとに、先ず竹簡一簡ごとに文字の影印と釈文を掲げる。そして、当該章全体の釈文、これに対応する王弼本、馬王堆漢墓帛書『老子』甲本・乙本、傅奕本を掲載した上で、「文字釈析」として、適宜分段して注解並びに現代語訳を施す。注解は単なる文字の考証に留まらず、思想面での考察も行っている。また各章末には「資料研究」として、通行本や帛書本との関係などにも踏み込んだ思想史的分析を記している。

このように、本書の特徴は、思想史的特質やその成立過程についても考察を行っている点にある。また、付録の王弼本『老子』と楚簡『老子』との対照は、王弼本『老子』を基に、楚簡『老子』該当箇所をゴシック体で表記するなど、今本『老子』と楚簡『老子』の全容を通覧するのに便利である。

『荊門郭店楚簡《老子》研究』（崔仁義著、科学出版社、一九九八年十月、一二九頁、横組繁体字・簡体字）

郭店楚簡『老子』の研究書。全四章および附録・図版などからなる。第一章は郭店楚簡『老子』の出土概況を述べ、第二章で楚簡『老子』と墓主との関係を、第三章で楚簡『老子』と馬王堆漢墓帛書『老子』並びに今本『老子』との関係を論じる。第四章は郭店楚簡『老子』甲本・乙本・丙本の釈文及び注解。また巻末には、楚簡『老子』検字表を付録し、竹簡の写真版を掲載する。この内、第四章と検字表は繁体字による手稿である。

本書は、楚簡『老子』を、文物本（荊州市博物館編『郭店楚墓竹簡』、文物出版社、一九九八年）とは異なったA・B・Cの三つに再編している。Aは文物本における『太一生水』と楚簡『老子』丙本であり、文物本『太一生水』該当部は、竹簡の配列も独自の見解によって改めている。Bは文物本楚簡『老子』乙本、Cは同・甲本に対応する。著者は、楚簡『老子』と馬王堆漢墓帛書『老子』との語気詞「也」の用法が基本的に一致するので、楚簡『老子』は、帛書『老子』の来源の一部分であると述べる。また、『太一生水』と楚簡『老子』丙本とを同一篇「老子（A）」としているのは、竹簡形態が同じであることによる。このAの形成について著者は、楚簡『老子』三種の中で最晩期のものとする。またBはCより後出であるとしている。

このように本書は、A・B・C三種の楚簡『老子』について、それぞれ成立年代と著者とを異にするテキストであると推測し、また各々の著者を『史記』に記される三人の老子（李耳、老莱子、太史儋）に比定するなど、大胆な見解を提示している。

『荊門郭店竹簡老子解詁』（劉信芳撰、芸文印書館、一九九九年一月、二三四頁、横組繁体字）

郭店楚簡の三種の『老子』写本（甲本・乙本・丙本）に対する釈文及び注釈、及び附録として載せる『太一生水』の釈文と注釈、楚簡『老子』と帛書『老子』及び王弼本との校勘、楚簡『老子』及び『太一生水』の検字表からなる書。

楚簡『老子』を、今本『老子』の章立てに従って分章し、各章頭を章名にする。そして章ごとに釈文を掲げ、

注釈を施し、思想面での考察を行う。『太一生水』については文字の考証のみである。

本書の検字表は画数索引も付されており、楚簡『老子』及び『太一生水』における字句検索に便利である。ただし本書の楚簡『老子』の釈文及び注釈部は、配列こそ甲本・乙本・丙本をそれぞれ順に並べているが、甲本・乙本・丙本による分編はせず、目次には本書独自の章名を並べるのみである。一方、検字表では甲本・乙本・丙本の簡番号によってその文字の登場箇所を示しているため、若干の不便さを伴っている。

『楚簡《老子》柬釈』（出土文献訳注研析叢書P003、魏啓鵬著、万巻楼図書有限公司、一九九九年八月、二七七頁、横組繁体字）

郭店楚簡の道家系文献である『老子』甲本・乙本・丙本、並びに『太一生水』に対する釈文と注釈、そして郭店『老子』と『太一生水』に関する「研究札記」からなる書。文字について、通仮字匯解と部首検字を付す。また、附録として馬王堆漢墓帛書『道原』の注釈と、『管子』水地篇に関する論文を載せる。

郭店楚簡『老子』は、甲本・乙本・丙本ともに、今本『老子』の章立てに従って分章した上で、釈文及び注解を施す。『太一生水』については、著者が三節に分けて釈文及び注解を施している。

著者も述べるように、郭店楚簡『老子』丙本と『太一生水』とは、竹簡形態と書写形態とが同じであり、同一巻であったと推測されている。本書は、楚簡『老子』と『太一生水』とを併載しており、郭店楚簡の道家系文献を研究する際に有用である。また、巻末には楚簡『老子』及び『太一生水』の竹簡文字摹本が載せられており、竹簡文字を確認する際にも便利である。

『郭店楚墓竹簡《老子》校読』（侯才著、大連出版社、一九九九年九月、一五八頁、横組繁体字）

郭店楚簡の三種の『老子』写本（甲本・乙本・丙本）に対する釈文及び注釈。序文は「老子及其思想的再発現」と題する論考になっている。また附録として、楚簡『老子』及び『太一生水』の、楚文字を釈定した「実録」と、著者によって校勘された釈文とを載せる。

本編の釈文及び注釈は、甲本・乙本・丙本ともに、今

本『老子』の章立てに従って分章する。そして章ごとに、初めに竹簡写真と釈文とを掲げ、次いで注釈を施して現代語（中国語）訳を行ない、そして最後に「読記」と題する思想面での考察を述べる。著者は楚簡『老子』を、老子本人もしくはその弟子によって春秋末期に形成され、基本的に完成している古抄本だと述べる。また『太一生水』で述べられている思想は老子に由来するもので、やはり春秋末期に形成されたものだろうと推測している。

竹簡写真は、当該部ごとに切り出して、釈文・注釈の付近に掲載され、また文字も鮮明であるので、楚簡『老子』の楚文字を確認するのに便利である。ただし『太一生水』についての注釈は行っていない。

『郭店楚簡老子研究』（池田知久著、東京大学文学部中国思想文化学研究室、一九九九年十一月一日、三六九頁、縦組和文）

郭店楚簡の三種の『老子』写本（甲本・乙本・丙本）に対する釈文及び注釈、並びに論文及び郭店楚簡関係論著目録からなる書。

初めに、「前書き」として郭店楚簡全般について概論を述べ、特に郭店楚簡『窮達以時』の成書年代について、戦国後期、紀元前二七八年前後もしくはそれ以降とする見解を示す。次いで郭店楚簡関係論著の目録を、論文集、著書、論文、新聞記事・会報、学会発表に分類して掲載する。

本編の内、第一編は「形成途上にある最古のテキストとしての郭店楚簡『老子』」と題した論文であり、著者は郭店楚簡『老子』を、すでに成書されていた『老子』五千言の一部分ではなく、なお形成途上にある『老子』最古のテキストと結論付けている。続く第二編からは、郭店楚簡『老子』甲本・乙本・丙本の釈文及び注釈である。今本『老子』の章立てに従って分章し、さらに竹簡によって分段した釈文を載せ、それを訓読して注解する。巻末には付録として、郭店楚簡『老子』の全文を載せる。

本書は、二〇〇三年時点で唯一の和文による楚簡『老子』の研究書である。また関係論著目録も、刊行年月日順に並べられており、研究史を追うのに便利である。

『郭店楚簡《老子》校読』（彭浩編、湖北人民出版社、二〇〇〇年一月、一九二頁、縦組繁体字）

郭店楚簡の三種の『老子』写本（甲本・乙本・丙本）に対する釈文及び注釈。また楚簡『老子』と他の『老子』諸本との対照、竹簡写真の一部を載せる。

甲本・乙本・丙本ともに、「校読」と題する章で、適宜分段しつつ注釈を行なう。そして「校定」と題する章で、「校読」における結果を踏まえた釈文を載せている。楚簡『老子』と他の『老子』諸本との比較対照は、楚簡『老子』、馬王堆漢墓帛書『老子』甲本・乙本、王弼本、河上公本、龍興観本（即ち景龍碑本。唐・景龍碑二年［七〇八］河北易州龍興観道徳経碑）を、今本『老子』の順に従って適当な句に分けて並べている。

『老子』諸本の対照では、その伝本において欠いている文字を「○」、楚簡『老子』及び帛書『老子』の欠損していて不明な箇所を「□」で示して、各伝本間の字句の相違を明らかにしている。ただし、竹簡写真は甲本の一部分のみであり、写真も不鮮明であることから、竹簡文字を確認する際には他の文献が必要とある。

『郭店楚簡老子校釈』（廖名春著、清華大学出版社、二〇〇三年六月、五七六頁、横組繁体字）

郭店楚簡の三種の『老子』写本（甲本・乙本・丙本）に対する注釈書。甲本は五編十九章、乙本は三編八章、丙本は一編四章に分けている。今本『老子』の章立てに従って分章しているが、章番号は郭店楚簡『老子』の記載順に対応している。

先ず、郭店楚簡『老子』の楚文字を釈定した上で、適宜分段しながら、馬王堆漢墓帛書『老子』甲本・乙本、王弼本、河上公本、傅奕本、范応元本、景龍碑本と校勘する。次に文字の釈読について、本書に先行する諸研究を紹介しつつ、それぞれに「案」として著者の見解を述べ、その上で釈文を決定し、その節全体の現代語（中国語）訳を記している。そして各章末尾には、思想史特質についての著者の見解をまとめる。

なお本書の刊行は二〇〇三年六月であるが、巻頭の著者前言は二〇〇一年七月三一日とあり、参照している先行研究は二〇〇一年二月のものが最新である。従って、楚簡『老子』についての最新研究を網羅しているとは言えないが、本書における文字の考証は極めて詳細である。また、巻末には縮小版ながらも竹簡の写真が掲載されている。郭店楚簡『老子』研究の重要な基礎的文献であると言えよう。